

結・たより, Vol.3

発行:神戸 : ウイメンズ・シンクタンク・ユイ

1995.10.23. - 12p

請求記号:震災-6-z26

阪神大震災・傷みを分かち合ふ

陸田 昭子

臼杵裕子さんを偲んで二句

大寒の忌日とはなる厳しさよ
散りぎはの花に見習ふことなきに

マスクして給仕係を勤めをり
避難所の焚火で燃やしゐるものは
春愁の避難先告ぐ走り書き
震災の焼土にけなげ初桜
通勤も野に遊べるもリュツク負ふ
秋暑し更地の増えし街となり
帰りたし神戸と聞くは身に入みて
子の強さ支へに雪に移り住む

第1回 ユイ・パーティーを開きました！



ウイメンズ・シンクタンク「ユイ」では、3月の結成以来、女性の目でまちづくりを考えるフォーラムを2回開いてきました。3人の呼び掛けで始めた小さな活動の芽が、今や150人の集まりに育っています。そこで多彩なメンバーの顔合わせも兼ねた「元気の出るパーティー」を8月26日、神戸市東灘区住吉本町の甲南大学平生記念館で開きました。正会員やゲストら40人が参加。歌あり、朗読あり、テーマ別のミニ討論会ありの楽しい宴になりました。

オープニングは、花邑（はなむら）てんさんの朗読で。中川俱子代表が活動経過を話した後、にぎやかに乾杯を行いました。初対面の人が多かったので、参加の皆さんには名札をつけてもらい、運営委員の長谷川京子が名前を読み上げるのにこたえて、お一人ずつ職業や特技、活動内容を話していただきました。その甲斐あってか、はたまた積極的な方が多かったのか、すぐにあちこちで人の輪が談笑が始まりました。パーティーに華を添えてくれたのが、琴や三味線など日本楽器も加えたポップスグループ「La・沙凡」の演奏と、白石方子さんの独唱。生演奏ならではの迫力でした。

飲んで、食べて・・・だけではなく、課題の部分も—ということで、途中1時間ほど時間を取り、ミニ討論会を開きました。以下の6つのテーマについて、ファシリテーターが話題提供を行い、興味のある話題に加わる形式です。3-10人程度でじっくり話し合ってもらって、その中から何かのプロジェクトが始まれば・・・ともくろんでいたのですが、残念ながら時間不足で、そこまで深められたグループはなかったようです。ただ、一つのテーマのもと何人かで話す—という形式は、参加意識が高まるのと同時に、別の意見を聞く刺激もあって、とても好評でした。また、次のフォーラムや集いでもどんどん話し合い、小グループ活動の芽を育てていきましょう。



ミニ討論会

(1) 町並み・景観

ランドスケープ・プランナーの林まゆみさんをファシリテーターに、都市計画に携わる人たちが集まり、緑豊かなまちづくりについて話し合いました。

(2) 遺族の悲しみのケア

死の文化研究者の安達和美さん。カウンセラーの人たちと「復興」から取り残されがちは人たちをどう支えるかを考えました。

(3) 震災と女性問題

神戸大助教授で、現在「震災時の働く女性の実態」について調査している朴木佳緒留さんを囲んで、体験談や震災以降の男女差別の実態を報告しあいました。

(4) まちづくり・ボランティア

新聞記者で、明石でまちづくりの市民グループにかかわる相川康子さんと、被災者がまちづくりにかかわる条件作りを話し合いました。

(5) 住まい・建築

建築家の中川俱子さんらと、安全で、暮らしやすい家と街のプラン、建築家の果たすべき役割を話し合いました。

(6) ネットワーキング

ドーンセンター情報コーディネーターの尼川洋子さん。さまざまネットワークとネットワーキングから生まれる力、そしてネットワーカーの役割について考えました。



被災、そして仕事

内村 敏子
(社会保険労務士)

被災して

「人生何が起こるか分からない。又、いつ死ぬか分からない」。これが今回の阪神大震災で実感したことです。

私が住んでいた所は被害の大きかった神戸高速鉄道の大開駅と、神戸地下鉄の上沢駅に挟まれた地域です。当日私は2階で寝ていましたが、激しい揺れと、バラバラと落ちてくる瓦で目を覚ましました。揺れが納まって周囲を見回すと、土ほこりが立ち、部屋の中は散々な状態になっていました。頭のすぐそばにあるタンスがわずかな柱の出っ張りに引っ掛かって倒れてこなかったのも、命拾いをしました。

早く外にでなければと思い窓ガラスを叩き割って飛び出しました。外に出て私が目にしたのは、屋根が落ちて2階が1階になり壁が崩れたわが家でした。長年住み慣れた家と自分が気に入って買い整えた家具調度が一瞬にして瓦礫となり母と仕事関係の書類が1階に埋まっているのを見て、呆然となりました。

母が亡くなり、その日からたった1人で避難所暮らしが始まりましたが、友人や知人からの様々な励みやまごころを山のように頂いて、だんだん元気になっていく自分を実感しました。失ったものも大きいけれど、自分の持てるモノを改めて確認することが出来たような気がします。それは、自分が築いてきた人間関係や取得した資格といった自分の身につけたモノです。また、前を向いて生きていこうという自分自身の生命も厳然と残っている。こう思うとき、何か生きている喜びがふつふつと湧いてくるのを覚えました。

そして、私個人としては最悪の状態の被災者ではあるけれども、社会保険労務士・行政書士として開

業しているのであり、その社会的使命を果たすべきだと思い至りました。

社会保険労務士として

神戸全体が壊滅状態になり、多くの方が仕事・職場を失う事になりました。私の関与する事業所も全壊や全焼となり、廃業した所もありました。連絡のとれない事業主の安否確認や、事業廃止の事務手続き、雇用調整助成金申請、従業員の離職手続き等、友人が避難所に届けてくれた自転車で須磨区から灘区まで走りまわりました。

幸い(?) 顧問先の数が少なく、他の社会保険労務士の方のように多忙でないため、2月2日より法律相談等のボランティア活動に参加しました。兵庫県社会保険労務士会が設けた、電話による雇用相談「雇用ホットライン」や神戸市が行った「市民法律相談」です。

ここに寄せられた相談内容には、「会社が全焼して社長も行方不明、どうしたら失業給付を受けることが出来るか。」とか「解雇されたが解雇予告手当は貰えないか」といった深刻な相談もありましたが、なかには「今まで雇用保険には加入していなかったが、加入していなくても失業給付が受けられると聞いたがどうすればよいか。」といった様な相談も数多く有りました。

この方たちのなかには今まで社会保険の適用除外の制度(一定の収入基準、配偶者の有無)を利用して、「社会保険には一切加入したくない、夫の扶養家族でいたい、もし保険料を取られるなら会社を辞める。」と言ってきた人達もいたのではないかと思います。

保険料は払いたくないが、貰えるものは貰いたいという本音が見え隠れし、労働者のエゴを感じることもありました。また、事業主のほうも加入させなければ保険料の折半負担の義務を逃れられるため、両者の利害が一致して加入をさせないということもあります。

今回、法律相談を担当して改めて考えさせられることがありました。それは、パートタイム労働者と呼ばれる主婦が真先に雇用調整を受けたことです。つまり経済活動のいわゆる安全弁の役割を果たした事実です。

租税の徴収にしても社会保障の制度にしても、適用除外という制度を導入している国の政策そのものが、女性にパート労働を選択させ、女性の自立を阻むものではないかということです。「女性は、家計を助ける程度に働けばよく、いざというときには介護の担い手としての役割を果たし、自分から離婚など言いださなければ、将来それなりの年金を与え生活を保障する。」このように考えるのは考えすぎでしょうか。

夫が厚生年金や共済年金に加入していれば、妻は保険料を納めなくても国民年金に加入していることになる第3号被保険者制度は、独身者や共働きの人達の負担増によって成り立っているものであり将来の年金財政を考える上からも見直すべきではないかと思います。どうしても第3号被保険者制度を残すなら、夫が妻の保険料も負担すべきでしょう。同じ条件で働いていても被扶養配偶者でなければ徴収されるのですから、平等という観点の上からも、全体の税率及び保険料率を下げた適用すべきだと思います。

例えわずかでも収入があれば、課税をされ社会保険料も徴収される。このようになれば、扶養家族の範囲内で働こうとする就業調整も必要なくなり、経済的にも自立する道が開けてくるのではないのでしょうか。

この震災を通して感じたことは、女性も自分の置かれた状況を客観的に見つめて、国の政策の意図するところを見抜き聡明な生き方をしなくてはならない、また、意識を高く持たなければ本当の意味で自立は出来ないということです。

これを機会に、自分なりに社会保障制度を見直し自分の意見をしっかり持っていきたいと思う昨今で

す。

**女たちの阪神大震災を考える会、
宝塚市」が主催して、'95宝塚女性フォーラム「女性と震災」**
－大地が揺れて、心が揺れて、社会を動かそう－

10月26日（木）～28（日）（土）

会場：宝塚市立女性センター

（阪急宝塚駅下車すぐ「ソリオ2」4F

申込み・問い合わせ

電話（0797）86－4006 FaX（0797）86－3487

震災からの日々

山口 路子

何から書けば良いのか、本当は何が起きたのか、大震災から8カ月過ぎた今も私の中ではあの日のこと、そしてあの日からのことはまったく消化しきれていないというのが本当のところですよ。

◇1月17日の早朝、ドーンという衝撃の後新築3カ月の我が家をいつ終わると思えぬ大きな揺れがおそいました。私は3人の幼い子供と、アコーデオンカーテン一枚隔てた部屋では夫が、今まで経験したことのない状況にただ声をあげながら、布団にしがみつくとしかできませんでした。幸い、私たち家族の寝ていた部屋には家具が一つもなく、電気を天井にとりつけるタイプだったため誰ひとり怪我をすることはありませんでした。

◇そして揺れが納まり、一瞬の静寂。カギをかけていたはずのサッシの窓は、家が傾いたためにいつのまにか全開になっていました。方々から「おじいちゃん」「おかあさん」「ガスガス」という様々な叫び声が聞こえてきました。私たちの住んでいる灘区桜口町はJR六甲道の南東にあり、古い家、古いアパート、賃貸マンション、分譲マンションが混在し、神戸六甲という環境の良さに加えて下町ムードを残す、本当に住み良い街でした。

◇とにかくガス臭く、傾いている家は恐ろしく、真っ暗闇の中で何とか子どもたちに服を着せ、靴下をはかせて家の外に出た時最初に目にはいったのは、崩れ落ちた隣のマンション、道路に倒れた電柱でした。向かいの御主人が「大丈夫ですか」と出てこられ、その懐中電灯をお借りして私たちは手当たりしだい服を着込み、「こういう時は広域避難や」という夫の言葉に崩れて開いたままの玄関もそのままに大和公園に向かいました。空が白み始めていました。

◇昨日までの風景がこんなにも変わってしまうものか、崩れ落ちた川の護岸、陥没した道路、傾いた電柱から垂れ下がる電線、そして潰された家、家、家。「誰か手伝ってくれ」の声、あちこちから上がる火の手を呆然と見ながら公園まで歩いていきました。公園には見慣れた顔があり、お互い無事を確認しあいでしたが、とにかく寒く、幼い子どもたちには辛いということで隣にある成徳小学校へ避難しようという声が上がりました。誰の許可も誘導もないままに、老朽化し来春には取り壊される予定の校

舎の講堂に避難しました。講堂のシャンデリアは落ち、時計は5時46分を指したまま止まっていました。そこで私たちは初めて地震がその時刻に起こったことを知ったのです。

◇シャンデリアを片づけ、椅子を並べ、各自家から持ってきた毛布を敷き、避難所ができました。これらの作業をしたのは女性たちで、男性たちは全てとっていいほど崩れた家の下敷きになった人たちの救出にむかいました。何度も襲う余震の恐怖と戦いながら、消防など来る気配もなく、ただ燃える家々を小学校の窓から見ていましたどれだけ時間がたったことでしょう。

「おなかですいた」「のどが乾いた」と言い出した子どもたちの声には私は我が家に食料を取りに戻りました。ジュース、お菓子残り物のパン、アメにいたるまで持てる物すべてを持ち、小学校にとって返し朝食とも何ともつかぬ食事を取りました。給食室から誰かが牛乳を持って来て、「いいよねいいよね、こんな時だもの」とみんなで、分け合いました。もうこの時点では講堂には200人近い人々が集まっていて、次に直面したのがトイレの問題でした。汚れてそれはもうひどい状態で、嫌がる子どもに何とか済ませ、私たちはやっと自分たちの置かれている状況を受け入れたのかもしれない。

結局私たち家族は何とか動いた車に乗り、阪急以北の私の実家に向かいました。私の実家は築50年ですが、幸い壊れず父母も祖父も無事でした。けれどそこも幼い子どもたちにとって落ちつける場所であるはずもなく、その日のうちに大阪にある夫の実家に脱出することになりました。7時間かけてついた大阪は私の気持ちを急速に冷えさせました。落ちかけた阪神電車をくぐり、崩れた阪神高速を横目で見、死者の数を数え上げるラジオを聞きながらやっとたどりついた大阪は信号が付き、電車が走り、ネオンが輝き、本当に別世界でした。迎えた夫の両親こそそんな気持ちはわかろうはずもなく、ただその日はテレビを無言で見つめ、疲れて眠りました。そうして長い長い一日が終わったのです。

私の夫は整形外科医で、勤務先の加古川の病院とは連絡がとれず、近所の病院に患者の様子を見に行ったりもしましたが、とにかく子どもの安全をと懇願する私に折れた形で仕事に心を残したままの大阪行きでした。翌18日、私たち夫婦は持てるだけの食料・乾電池をリュックに詰め、西宮北口から歩いて六甲を目指しました。変わり果てた町並み、29年神戸に住み続けた私には全てを失った気持ちでした。友達が生きているかどうかさえわからず、ただ自分たち家族が怪我なく生きている、それだけが事実でした。翌19日、夫は勤務先の病院にむかい、その日から単身赴任となりました。結局私と子どもは1週間で夫の実家を出て、奈良の親戚・友人の家に3泊した後、私の実家に戻りました。

◇その日から始まった水汲み、並んで食料を買う毎日、風呂屋さんに長いこと並んで20分で4人がはいるという生活でしたが、私には神戸にいるというだけで満たされる何かがありました。けれど、子どもたちの遊びの揚がないことに気づき始めました。実家には年老いて地震でますます気難しくなった祖父がおり、その世話をする母も疲労している状態でした。私は自宅近くの私立保育園を思いきって訪ね、事情を話してこども3人を緊急保育という形で預かってもらえるようになりました。2月の終わりのことでした。

◇週末に神戸に帰ってくる夫は避難者で急に患者が増えた加古川での勤務に疲れており、自宅の片付け・修理の手配は全てとっていいくらい私がやりました。お互いの疲れから夫婦げんかも絶えませんでした。

◇子どもを保育園に預け続けられるように私は仕事さがしを始め、何とか自宅近くの不動産会社の事務という職を得ることができ、現在に至っています。その後、夫は地震で実家が全壊した方のピンチヒッターとして米国に留学しました。話し合った結果せつかくの再就職で、やっと落ちついた子どもたちの生活を変えたくないということで米国には同行しませんでした。何よりも私には神戸の復興も見つめていたいという意識が強かったのです。

◇仕事の性質上、神戸の街の状況が手に取るようにわかります。その中で一番強く感じるのはやはりみんな神戸が好きで、この場に戻りたい、住み続けたいという思いです。行政が勝手に線引きした街で、そんな人々のささやかな願いはかなえられるのでしょうか？ 夕方になると「お達者カー」を押して散歩に買い物にと出掛けていたお年寄りたちはどこに行ってしまったのでしょうか。プレハブの商店が次々と再開し、活気を少しずつ取り戻しつつある街を以前以上にあたたかい街にしたいと思います。

◇私一人の力は本当に非力だと思います。失ったものはあまりにも大きすぎました。けれども何かしたい、何かできるのではと考え続けていたところで、「ユイ」に出会いました。あの日のことをこうして書き残す気持ちになったのも初めてです。「ゆるやかに、楽しく、元気に」は今の私自身の目標でもあり、今神戸が一番必要としていることだと感じています。

私にとっての北京

－第4回世界女性会議に参加して－

山田 芳子（高齢社会をよくする女性の会・大阪）



1995年8月29日から9月3日まで、出入りを含めて6日間の北京は私にとっていったい何だったのか？

私はいつか世界女性会議に行きたいと思っていた。国連が開催するこの会議は1985年ナイロビで第3回が開かれて以来10年ぶりであり、私にとって最後になるかもしれないという思いもあった。「高齢社会をよくする女性の会・大阪／京都」で総勢14人のツアーを組むことができ、独自のワークショップに参加申込みはできなかったが、東京の「高齢社会をよくする女性の会」のワークショップの一部を関西で受け持つということ決まった。私たち関西のメンバーは「阪神大震災と高齢者、とくに女性」にテーマを絞り、6月に開催したフォーラムの記録をもとにメッセージを構成し、英訳したものを準備した。以下は要約。

1995年 1月17日 5時46分、日本国の関西地方、神戸港沖淡路島を中心とする地方に大きな地震がありました。6月現在で約5500人の死者があり、女性が男性より1000人以上も多く、60歳以上の女性が

そのうち55.2%を占めています。この大震災による犠牲者に高齢者が多く、高齢者が多かったということは現在、世界の難民に女性と子どもが圧倒的に多いという現状と決して無縁ではありません。日常生活のなかでも差別的状況におかれている弱者は、危急に際してはなおいっそう状況が悪化します。

一人暮らしの高齢女性の犠牲も多く老朽化した住環境によるもの、プライバシーの侵害という見地から個人の状況の把握が難しいという情報の問題、この二つが考えられます。

広範囲にわたって被害が出ているために救援活動にあたる人が被災をし、在宅の介護を要する高齢者への派遣ヘルパーがいなかったり、ボランティア活動も間に合わないということもあります。これは緊急を予想したシステムができていないからです。

震災後、各地で応急の仮設住宅が建てられ、たくさん的高齢者が入居していますが、新しいところでは集会所も自治会もなく、孤独に亡くなっていく一人暮らしの高齢者もでてきます。

アピール

『生きてきた時間の長さだけ、ネットワークが広がる社会、ひとりぼっちの高齢者をつくらない暖かい社会が望みです』

このワークショップは9月1日に開かれ会場は中学校の教室で定員50人というところに200人ちかい人が集まり、メッセージと後ろに掲示した被災地での暮らしの写真に衝撃を受けていた。翌日9月2日にはテント会場でのワークショップ、宝塚の山林知左子会員から被災者としての体験メッセージが英語でなされ、参加者からため息がもれた。クライシス（危機）に際し女性や弱者にしわ寄せがくるのだけではなく、したいと思う。

私の提案 定期借地権

長谷川 京子（弁護士）

定期借地権というのは、平成4年施行の借地借家法で新たに導入された、更新のない期限設定の借地権のことです。定期借地権はこれまで、地価が高くなりすぎて売買が成立しにくく、地主側にも税金の負担等で売買のメリットが少ない場合などに利用されてきました。

震災後、被災者の経済力は低下しており、地価は必ずしも下がらない中で被災したもとの住民が被災地域の中で暮らすための土地を得るにあたって、この定期借地権制度が利用できないか、というのが提案の趣旨です。

定期借地権によって土地を調達する場合の標準的な対価は、土地価格の20%相当額の保証金と残80%相当額に対する相当利回り率（2～3%）を乗じた金額の地代で済みます。例えば5000万円の土地なら1000万円の保証金を支払い、年間80～120万円の地代を負担することで、建物所有のために利用できるわけです。他方地主のほうも普通の土地賃貸借と違って更新がありませんから、約束の期限がくれば保証金だけを返還して土地を取り戻すことができますし、特約で返還時、地上建物の買い取り請求を受けないようにもできるので、土地回収のコストがかかりません。

同法22条によれば（1）存続期間を50年以上の確定期限とすること（2）契約更新や建物の再築による存続期間の延長がないことをさだめること（3）賃貸借終了時には建物を収去して土地を明けわたすことをさだめること（4）上記特約の内容を明記した賃貸借契約を公正証書等の書面にする、により定期借地権が認められることになっています。敷地を定期借地権で調達した新規マンションの分譲価格引き下げ効果などが注目され、最近話題になっています。

「震災文庫」の一般公開！

稲葉 洋子
(神戸大学附属図書館)

神戸大学附属図書館では阪神・淡路大震災関係資料を全国の皆さんに呼びかけて収集を続けてきました。

現在、約1700タイトルと3000点の資料が集まっています。これらの資料を研究者だけでなく、市民の方々にも震災の検証や防災のまちづくりに役立てていただけるように一般公開を始めます。

公開日 10月30日（月）～

場 所 神戸大学人文・社会科学系図書館（六甲台）

☆ なお、現在、インターネットで収書速報を流していますが、検索も可能になりましたのでご利用下さい。

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/eqb>

☆ 一般公開後も資料の収集は継続していますので、ご協力をお願いします。

資料送付先：郵便番号657 神戸市灘区六甲台町2-1神戸大学附属図書館情報管理第一掛 稲葉洋子
電話078（803）0423

新聞記事で見る「震災と女性」

1995年2月～10月 作成：尼川 洋子

- パート解雇も続出／女性らの訴え切実（神戸 夕刊2／4）
- 震災解雇相次ぐ——兵庫県内／大半が女性、パート照準（産経 朝刊2／9）
- 震災同居：私も85歳の父引き取り感情押え切れず感情爆発／無事を喜び握った手も...時とともに思い現実が...（毎日 朝刊2／16）
- 復興に女性の声を／「まちづくり推進会議」参加呼びかけ兵庫県立女性センター（産経 朝刊2／21）
- 女性の相談から見たもの（神戸 朝刊2／26）
- 震災体験 町づくりに生かそう／男女共生や弱者を視野に（読売 朝刊3／6）
- ウイメンズネット・こうべ 女性の立場で被災者支援：女たちの家、きょう再開／電話相談や心の

ケア（神戸 朝刊3/10）

- 頼ってばかりいられない！！さあ自立の時／もうすぐ新学期、去り行くボランティア 女性自治会も誕生：神戸（毎日 朝刊3/16）
- 大震災 人とくらし／職場がなくなるパートたち（1）～（3）（読売 朝刊3/18～3/20）
- 慣れない「同居」募るストレス／阪神大震災2か月半——増える女性の悩み相談（読売 朝刊3/27）
- 地域との一体感を 仮設住宅入居者と地元住民／西区の2女性「西女性会議」結成へ（毎日 朝刊4/7）
- 女性パートタイマー 地域型組合で団結／阪神大震災で解雇続出：ユニオン旗揚げし成果（日経 夕刊4/10）
- 県女性センターでフォーラム 男女共生のまちづくり／参画の機会と受け皿を （神戸 朝刊4/14）
- 女性の権利110番：被災者の悩みに答えます／地震で夫が失業、暴力を振るうように…（産経 朝刊4/15）
- 助産婦さん連携：被災母子支援のネットワークを／体験わかち合い悩み相談（読売 朝刊4/15）
- 女性と大震災（1）～（7）（産経 朝刊4/28～5/5）
- 阪神大震災 女性の失業：政治、企業が力合わせ「地位安定」へ支援急げ／パートなど狙い撃ち「出勤できない」口実に（毎日 朝刊5/11）
- 被災地の風'95地方選の底流／女性よ生活支える視点市政に（神戸 朝刊5/22）
- 女性の視点で提言します／シンクタンク「ユイ」結成：復興の姿 話し合ううちに見えてくる（読売 朝刊6/6）
- 復興へ県民の提言集／男女共生の街づくりを：労働や子育て——15項目（神戸 朝刊6/7）
- 町づくりに女性の“英知”を／24日に県立女性センター市民参加探るセミナー（神戸 朝刊6/13）
- 大震災 私たちのそれから／主婦の輪 生活犠牲にせず長続きを（神戸 朝刊6/27）
- 夫婦仲も揺るがした大震災／大阪の民間団体被災者向けの心のケア電話：1割が離婚や性生活相談（毎日 朝刊6/28）
- 主婦の生活目標 震災で変化／頼れるのは隣近所「地域交流」増える：広告代理店、1000人に調査（読売 朝刊7/8）
- 家族にも深い亀裂 阪神大震災、あす6カ月／離婚や遺産相続トラブル調停申し立て40件に：神戸家裁、今後も深刻化の恐れ（毎日 朝刊7/16）
- 就職難でトラブルも／女性のこころとからだ電話相談4カ月まとめ：被災地で多発（神戸 朝刊7/16）
- 弱者へ深刻な打撃：震災女性電話相談 4カ月／子の手にもチ針刺した母、親兄弟との同居で気苦労、勉強遅れ、子の進学不安：夫婦にきずな固ければ…（朝日 朝刊7/21）
- 「地震で分かった！アナタの正体」：震災、夫婦間も裂く／県女性センターまとめ 離婚相談が3倍に：生活変化でミゾ深まる、子供の名前忘れた／職失って妻に暴力（神戸 朝刊7/27）
- 高齢女性パニック：阪神大震災で70代中心の340人調査／「もうだめだ」…女性35%、男性13%「自分が頼り」…女性14%、男性34%（朝日 朝刊8/31）
- 「震災離婚」の危機？／妻の相談20件 夫はゼロ：「私を置いて逃げた…」。夫婦に広がる心の亀裂（朝日 朝刊9/1）

- 世界女性会議／阪神大震災被災者訴え 職業女性の打撃大きかった （神戸 朝刊9／2）
 - 世界女性会議／震災で浮き彫り：被災高齢者やパート問題…各国女性に高い関心（読売 朝刊9／3）
 - 震災の構図／「おうち、大丈夫でした？」：女子学生「被災でも差別」（朝日 朝刊10／9）
-

スタッフだより

●運営スタッフの会議は中川俱子さんの事務所「アルプラン」が御影に移転したこともあり、もっぱら阪急御影駅近くで、おいしい店を見つけてはゆっくり食事をとりながら、会議（？）をしています。全員仕事を持ってるのに、これがまた集まりがいいのです。“ゆっくり、楽しく、元気に”という運営方針に“おいしく”が加わりました。

運営スタッフに陸田昭子さん（本高砂屋 広報部長）が加わって下さって、「ユイ」がさらにパワーアップしました。

●運営スタッフの活動

安達和美

「神戸新聞」に生活エッセーを連載しています。

中川俱子

9月27日、芦屋市女性センターで「まちづくりから住宅を考える」という視点で「アルプラン」の設計した住宅を中心に話をしました。参加者は40名程です。震災の経験、「ユイ」の活動等も報告しました。「アルプラン」の住宅等のパネル、模型も展示しています近くに行かれた方はぜひご覧になって下さい。

10月27日には宝塚市女性センターで、「フォーラム 女性と震災」イベントの『聞いて私の声を！—女の目でつくる街づくり—』に助言者として参加します。

元気アップ自立活動支援事業

第3回 ユイ・フォーラム

女性たちの発言 住まい・暮らし・地域

震災から10カ月近くがたとうとしています。震災からの復興は私たちにとっては安らぎ、支え合える住まい・暮らし・地域を作っていくことです。被災地の中で生活しながら、思ったこと、考えたことを女性の立場から発言していきたいと思います。

第1部 パネルディスカッション

パネラー	石東 直子（都市プランナー 石東都市・環境研究室）
	大崎 洋子（女たちの会社「ポレポレ」代表）

弘本 由香里（大阪ガスエネルギー・文化研究所研究員）

コーディネーター 中川 俱子（建築家 「ユイ」運営スタッフ）

第2部 ワークショップ

テーマ	(1) 住まいと人.....	コメンテーター	弘本 由香里
	(2) 地域と人.....	〃	渡辺 和美
	(3) 暮らしを支え合うネットワーク.....	〃	大崎 洋子
	(4) 住まいへの提案、コレクティブ・ハウス...	〃	石東 直子
	(5) 人の間を育てる情報.....	〃	尼川 洋子

日 時： 12月2日（土）午後1：30～4：30
（1：15開場）

場 所： 神戸市生活学習センター
神戸市中央区橘通3-4-3 電話（078）361-6977

懇親会&忘年会

フォーラム終了後、6時～8時、
「チサンホテル」梅の間

会費 4千円

* 11月30日までに申し込み下さい

葉書またはFAX（078）822-4141